

新晃工業

電算型空調機 堅調な動き

DC関連改修案件が続伸

空調機器総合メーカー、新晃工業（社長＝武田昇三氏）は、データセンター（DC）で最も重要な課題となっている熱対策について、電算型空調機（D型機）をメインに需要に対応している。

DC用空調機の冷却対象となるのは「電力熱を発生させるIT機器」で

あるため、安定して冷気を提供できることが求められる。また、一般オフィスと異なり、DCでは24時間365日の連続運転が必要、吹き出し方式ではDCはフリーアクセスに必要な個所に重点的に冷気を吹き出す。こうしたことから同社の製品範囲では「電算型空調機が

主役になる」（藤原博史・技術部部長代理）と話す。電算型空調機にはベルト駆動型と直動運転型の2タイプがある。風量範囲は両タイプとも1立方方尺から3立方方尺。高い省エネ効果も求められるため「高効率ファンの搭載は必須条件（同）」と

なっており、「従来はシロップファンを採用していたが、近年ではブラクファンがメイン（同）」となっている。

新晃工業のブラクファンについてはすでに市場の高い評価が定まってお

り、その高効率はスーパードコンピュータ「京」の冷却システムでも遺憾なく発揮された。「京」で採用されたのはダイレクトドライブブラクファン。ベルト式シロップファンの効率が50％であるのに対し、同ブラクファンの

全圧効率は70％。ファン容量を小さくして消費電力をシロップファンと比べて約半分に削減した。

近況について同社では「企業で稼働中のサーバの熱対策とそれに関連する改修の引き合いを多くいただいている（同）」とし、引き継ぎ対応していく考え。また、導入事例が増加している屋外設置可能なコンパクトサイズのコンテナ型DC向け空調機にも対応、守備範囲を広げている。